

小林秀雄著『本居宣長』:『『言靈』の各文學への變遷:即ち『古事記・萬葉・古今・新古今・源氏』等への「轉義」と、その主題への「合體」を見る』:その「關係論」的纏め。

\*『『言靈』(物:場 C')の營みを、明瞭に辿る事は誰にも出來ないにせよ、それ(言靈)が、和歌史を一貫する流れ(即ち、轉義D1の至大化)を成してゐるといふのが、宣長の歌學の基本にある直觀である』(P249)。

\* P248關係論:①言語(物:場 C')②言靈(物:場 C')③環境(物:場 C')⇒からの關係:①は②といふ自らの衝動を持ち(D1の至大化)、③に出會ひ(D1)、「④:自發的にこれに處してゐる[『鋭敏に反應』(轉義:D1の至大化)]」⇒「⑤:姿」(④的概念F)⇒E:事物に當つて、己(①)を驗し、事物に鍛へられて、己の⑤(F)を形成(合體:Eの至大化)してゐるものだ」(③への距離獲得:Eの至大化)⇒(△枠):①への適應正常。

『「祝詞・宣命」に強く發揮された『言靈』の變遷』

\* P268關係論:①祝詞②『言靈』③助辭(てにをは)④『いともあやしき言靈のさだまり(格)』⑤『古事記』⇒からの關係:①に一番強く發揮された②は、③④に乗じて⑤に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)⇒⑥:阿禮(巫女・語部)⇒⑥の『誦習(よみならひ)の朴』に合體する⇒宣長(△枠)。

(物:場 C')…①『言靈』・②『助辭(てにをは)』=『いともあやしき言靈のさだまり(格)』

からの關係(D1の至大化):轉義(D1の至大化)

I. 「『祝詞・宣命』に①は一番強く發揮された(即ち、轉義D1の至大化)」。

II. 「『古事記』:「①は②に乗じて II に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

III. 「『萬葉集』:「①は②に乗じて III に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

IV. V. 「『源氏』:「①は②に乗じて IV: V に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

VI. VII. 「『古今集』:「①は②に乗じて VI: VII に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

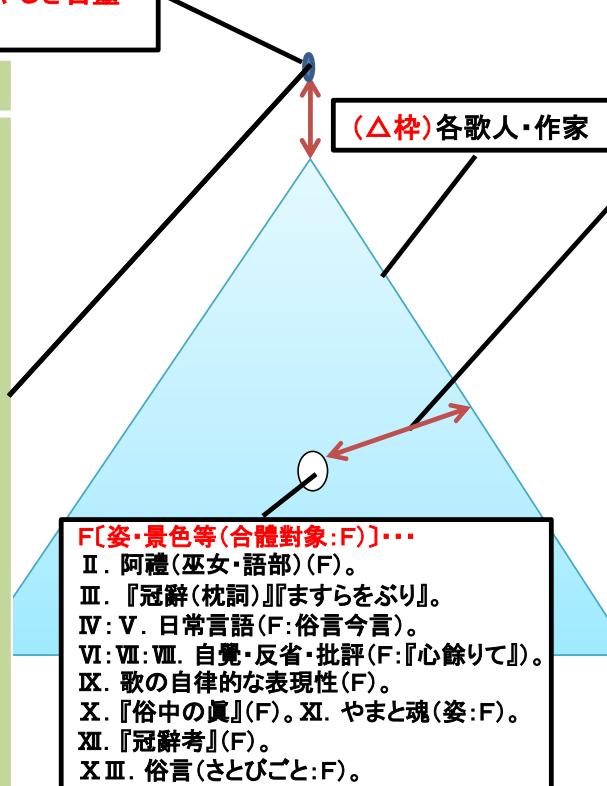
VIII. 「『土佐日記』(貫之):「①は②に乗じて VIII に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

IX. 「『新古今』:「①は②に乗じて IX に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

X. 「『契沖』:「①は②に乗じて X に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

XI. 「『眞淵』:「①は②に乗じて XI に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。

XII. 「『宣長』:「①は②に乗じて XII に結ばれ(即ち、轉義D1の至大化)」。



《姿・景色等(合體對象:F)に合體(即ち、F⇒合體Eの至大化)》

II. 阿禮(巫女・語部)(F)の『誦習(よみならひ)の朴』に合體。

III. 『冠辭(枕詞)』・『高き直きこころ』『ながらの姿』に合體。

IV. 『物の哀F』に合體。即ち日常言語(F:今言俗言)が作り上げる姿(『物の哀F』)に合體(即ち、F⇒合體Eの至大化)。

V. 當時の日常語としての『やまと魂(F:『心かしこし』の意)』に合體(即ち、F⇒合體Eの至大化)。

VI. ①P256「自覺とか反省とか批評(F:『心餘りて』姿)」とか呼んでいい精神傾向の開始に合體(F⇒合體Eの至大化)。

②とは即ち、『觀念(F)といふ身軽な己の正體に還つて(F⇒合體Eの至大化)』と言ふ合體。

VII. P256「やまと歌の種になる心(『言靈』と同)が、自らを省み(F『心餘りて・反省・批評』で)、『やまと心』『やまと魂』といふ言葉(姿F)を思ひつく(即ち、F⇒合體Eの至大化)。

VIII. 「表現の自在(F:自覺・反省・批評)」即ち『觀念(F)といふ身軽な己の正體に還つて(F⇒合體Eの至大化)』への合體。

IX. P200「『新古今』の姿[「歌の自律的な表現性(F)」]に、歌人等の意識が異常に濃密(即ち、F⇒合體Eの至大化)になつた一時期(『歌に化せられる』P207)があつた」。

X. 「『歌學』は『俗中の眞である』(F)」に合體(即ち、F⇒合體Eの至大化)。XI. 雅言[みやびごと(「あしひきの」等)]もて飾れる姿(F:『冠辭』)に、眞淵は感得(即ち、F⇒合體Eの至大化)」。

XIII. 『古今集遠鏡』の俗言(さとびごと)に合體。